

## チャドにおける砂漠化防止活動

高橋一馬

### 地球環境と砂漠化

今日地球規模における環境の悪化には目を見張るものがある。オゾン層の破壊や地球の温暖化、熱帯雨林の喪失、酸性雨、異常気象の頻発などであって、いずれもが、人間が利便を求め、大量生産、大量消費という生活形態と経済性を優先した結果、再生不能な破壊を引き起こし、その代償を将来に課そうとしている。砂漠化もその一つであって国連の発表によれば、地球上で毎年 600 万 ha が砂漠化していると警告を発している。

アフリカ大陸北部にあるサハラ砂漠の南縁部は「岸辺」を意味するサヘルと呼ばれ、ちょうど南からの緑と北からの砂とがせめぎ合う所にあり、過去 30 年間に 200 km も砂漠が南下したといわれる。まさに砂漠化の最前線であると同時に飢餓ベルトとも呼ばれる慢性的食糧不足地帯でもある。地図を開くと、ちょうどアフリカ大陸の真中あたりに、チャド湖が描かれているが、この湖は流入河川のみで流出河川は 1 本もないため、この流域に降った雨はほとんど全部チャド湖に集められるしくみになっており、いわば雨量計の役割を果たしている。この湖の水の量を見れば一目瞭然に降雨の状態がわかるわけである。雨季に膨脹する湖水も乾季には一部は地下へ浸透し、大部分は蒸発して縮小し、年々これを繰り返しているが、近年砂漠化の影響により、降雨量も減少したために、たとえ雨季の最も湖面が拡がる時でさえ、もはや、かつての 10 分の 1 にも達しなくなってしまった。

ここ 30 年来に急速に進んだ砂漠化は、自然的要因に加えて、むしろ人為的要因に依るもののがより大きいといわれている。つまり家畜の過剰放牧や焼畑農業、さらには薪炭材の伐採などにより、植物の成長速度以上のスピードで、人

---

TAKAHASHI, Kazuma : Action for Greening SAHEL in Chad  
緑のサヘル

間や動物が消費してしまうため、成長が追いつかず、大地を覆っている植生は劣化の一途をたどることになる。遮るものがないと風は水分を奪い、さらに表土に含まれる有機質や粘土、シルトなども一緒に持ち去ってしまうため、重くて風で飛ばない礫や砂だけがそこに取り残される。礫や砂には養分も少ないので、植物は育ちにくくなり、植物が少なくなると、困ったことに降雨量も減ってくる。そして雨がなければ植物はなおさら育たない、という悪循環をくり返して大地は不毛化して行く。

### 砂漠化防止と緑化への取り組み

何とかこの悪循環を断ち切るにはどうしたらいいか？ 砂漠化を引き起こしている原因を取り除ければいいのだが、皮肉なことに人々が生きていくために必要な、日常生活そのものつまり人間活動が、大きな要因の一つになっているだけに事態は簡単にはいかない。しかしながら、とにかく植物（＝緑）がポイントであることは間違いないわけで、たとえわずかづつでも緑を殖やして行くことが、砂漠化防止につながる第一歩だと信ずる。

### 緑化のむつかしさ

“植付け後の管理の如何が成否を決めると”

サハラ地域の植林活動は必要性を叫ばれながらも、なかなかうまくいっていないのが実情である。それにはいくつかの厳しい問題が考えられるが、一つは降雨で

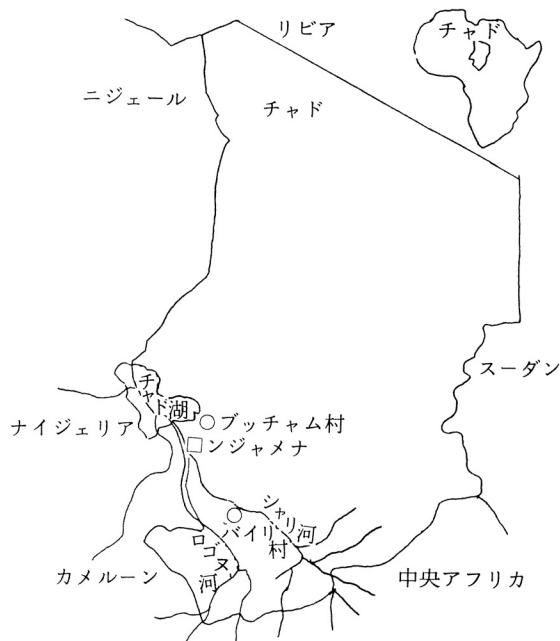


図-1 チャドプロジェクト位置図

ある。もともと、年間降水量 200~500 mm 位の地域であるため、絶対量が不十分であるわけであるが、このわずかの降雨も 3~4 か月の雨季にのみ集中し、残りの 8 か月位は全く降らないため、せっかく植林しても、厳しい乾季を乗り切れずに枯死してしまうことが第一に挙げられる。次に移植後の管理のむつかしさである。まさにこの点こそが人間活動と直接に関係するところであり、最大の難関である。とりわけ、家畜の食害と野火は大問題である。

家畜に依存して生計を立てている人々は、乾季になって青草がなくなつて来ると、早く新芽を出して飼料を得ようとして、又ツェツェバエなど害虫を駆除する手だてとして、しばしば枯れ野に火を放つ。これが燎原の火のたとえ通り

延々と広まり、何日も燃え盛り、時には小さな村全体を火に巻き込む。せっかく苗木を育てて植え付けられた植林区の幼苗が無残な姿に陥っているのを通りがかりに見かけることがある。食害については、農民が耕作している畑の中に入り込んで農作物を食い荒らし、農民と家畜の持ち主との紛争は絶える間がない程頻繁に生じる。家畜の中でもヤギとヒツジは繁殖力も強く、するどいトゲの付いている枝でもものともせずに、しかも後足で立ち上がりながら緑を喰い尽くす。したがってせっかく植えた木を、喰われないようにし、さらに火から守るには、監視体制が必要であって、地域住民や遊牧民と話し合いの上で植林後の一定期間ガードマンを張り付けたり植えた木の一本一本に喰われないようトゲノキや金網で巻いて保護を加えるか、

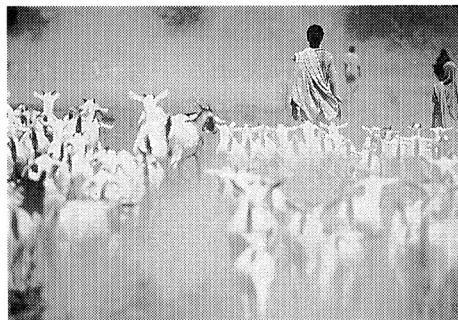


写真-1 降雨量の不足する乾燥・半乾燥地では、わずかに生える草を家畜に食べさせ、そこから、生活のかてを引き出す生業形態が取られる



写真-2 金網をめぐらして、人間と動物を寄せつけずに 3 年もすると、植林も何もせずとも、これだけの違いが出て来る

植林区全体を有刺鉄線や柵をめぐらして家畜や人間をも寄せつけないようにしている例もある。

この全面を囲い込む方法を採用するためには、一つ大きな問題につき当たる。それは植林とかアグロフォレストリーをやろうとする場所は、一般に土が肥えており、水の便が良いという所が選ばれるが、同様にこうした場所には草も生え易く、家畜に必要な水もあるとなれば牧畜民にとっても大切な場所であるため、ここからしめ出されると困ることになる。だからよく話し合って植林区を全面囲い込むのではなく、いくつかのブロックに分けて、植林後2~3年は家畜を入れないようにし、樹高も大きくなり、少々下の葉を喰われても枯れないと位になったら、そこを開放し次のブロックへ植え付けていくというように計画的に緑を殖やしていくようにし、農耕民と牧畜民とが共存共栄をはかれるようになることが重要なことになって来る。

### マジアの谷とケイタの谷の事例

厳しい条件下で行われる緑化活動は自ずから採り得る手法も限られて来、成功例も多いとは言い難いが、そうした中にあって2つの事例はとても興味深いものがあったので少し紹介させて頂くと、一つはマジアの谷の例である。マジアの谷は、ニジェール共和国の首都ニアメから北東へ500km行ったタウアという町からさらに150km程のところの、ちょうどテーブル台地が切れ込んで形成された河谷平野のような様相を呈した地域である。もともとアメリカのピースコート（平和部隊）のメンバーが始めたプロジェクトがCARE INTERNATIONAL（世界最大級のNGO）に引き継がれた。この地区も砂漠化によって植生が劣化し、定期的に吹きすさぶハルマッタンと呼ばれる季節風によって表土の肥沃な部分の飛散と土壤水分を奪われ、ソルガム、ミレットなどの食糧生産が低下していた。そこで、防風効果を求めて2列のニーム (*Azadirachta indica*, インドセンダン) の並木が谷の端から端まで一直線で、風向きに対して直角に100mピッチでちょうどクシの歯のように、下の平野部から谷頂部に至るまで整然と植林された。1975年から1990年までの15年間に、防風林の総延長は750km, 700万本を植えた、と案内してくれた係官は説明し、しかし、このプロジェクトも初めはなかなかうまく運ばなかったともつけ加えた。それは、一面の作物畠の中に植林をするわけだから、大きくなるまでの二年位はまだ防風効果も出て来ず、農作業の邪魔になったり、光線を遮られた部分は収穫が減少するという農民の声であった。しかし熱心に農民に将来のことを説き、

行政側の協力も取りつけながら地道にねばり強く活動を積み重ねて行くうち、農民も次第に積極的に参加するようになった。そして1984年アフリカを襲った大旱魃は数千万人の被災者と、数百万頭の家畜を失ったといわれる程大きかったが、この時でも他の地域ではほとんど壊滅的打撃を受けたにもかかわらず、マジアの谷は、この防風林のおかげで被害も最小限にくい止めることができたと報告されている。そして今では、プロジェクト開始前に比べて作物生産は平均23%の増収になっている。マジアの谷のほぼ全体を見渡せる高台に立った時から、その防風林に近づくにつれ、何となく心が明るくなるような気がした。それは、何の小細工もないただ2列のニームの並木を谷の下から上のはうまで等間隔に植えただけの、単純明快な、誰にでもすぐわかる方法で植えられていて、ジョンウェインに象徴される、いい意味でのアメリカ人気質を感じ取れたためであった。

ケイタの谷は、マジアの谷に隣接しており、礫や岩がゴロゴロした大丘陵地帯の山すそで細々と農耕を営なみ、農閑期には国境を越えてナイジェリアまで出稼ぎに出て生計を立てている半農半牧の寒村地帯である。ここに、1984年から7年計画でイタリア政府と国連食糧農業機関(FAO)、世界食糧計画(WFP)の援助側と、ニジェール中央政府、地方行政機関、農民組合、婦人会、地元住民も加わった、一大総合農村開発プロジェクトである。筆者らが訪れた時案内してくれた、イタリア人顧問は「ケイタプロジェクトの全貌を理解するには、是非1週間の時間を持って来て欲しい」と言われたが、それ程に活動地域も広範囲であるばかりか活動内容も多岐に渡っている。小学校建設、診療所、井戸、授産所の建設と運営、県民総合の組織化と支援などが挙げられるが、中心となるのは何といっても、土木事業を含めた農業基盤の改善と植林活動である。乾季のうちに、植林用の穴掘りを、平地ばかりでなく礫のゴロゴロしている斜面から丘のてっぺんまで人海戦術で行なって、雨季を待ち、前もって育てて置いた幼苗をほぼ1m<sup>3</sup>の掘られた穴の底に植え付ける。その後も一切灌水は行なわず雨季(6月-9月頃)に降る300mm~500mmの降雨のみで厳しい乾季を乗り切り、翌年の降雨まで何とか生きのびる。植えられている樹種は乾燥に強いプロソピス(*Prosopis juliflora*)が多かった。ちょうど降雨のあった直後に訪問したため植穴の底に植えたばかりの苗木(約30cm)は周囲の雨も集まるため頭だけ出してほとんど水没したようにさえ見えた。2年目の植林区をのぞくと、何とか乾季をしのいで生き残った苗木のたくましさと、風や雨で運ばれてきて植え穴にたまつた、有機質や粘土に雑草の種子も混じって発芽し若草も芽ぶい

ている。3年目になると、プロソピスの樹高も2m程になりすっかり成長して樹冠もこんもりとして見え、根元の雑草も、しっかり根を張っている。ここでも、植林後3年間は家畜を一切寄せつけないように話し合い、農民は飼料を鎌で刈り取って家に持ち帰るようにしていると言っていた。

土木事業も実施している。砂漠の大洪水と呼ばれる位、一度に大雨を降らせることがあるがそんな時、傾斜部は表土を剥ぎ取られ、時には、下流の畑を埋めつくすことがある。ケイタの谷では、蛇籠に石を詰め、砂防と水の地下浸透をはかって堤を築き、その上流には水源地の涵養と、土砂くずれ防止に植林もほどこしていた。

こうしたケイタの谷のプロジェクトは一大事業であり毎日3,000人がフードフォーワークで働いており、予算も莫大なものであるため、いつか外部からの援助がとだえた時に、自分達の力だけで運営し自立をはかれるだろうかという疑問は大きく存在する。しかし、砂漠化から農地や生活を守るという受身ばかりではなく、丘の頂きにまで植林してでも緑を取り戻そうという非常に意欲的な取り組みであって、このことは、一度壊れかかった環境でさえ、支援団体も行政も、地域住民も、関係者が力を合せて努力をすればまだ間に合うかも知れないという希望を与え勇気付けてくれるプロジェクトである。

### 緑のサヘルのチャドにおける活動

アフリカ、サヘル地域の砂漠化防止と地域住民の食糧自給の達成をめざして結成された緑のサヘルは、調査団を派遣し、ニーズの掘り起こしと政府側との協議を繰り返し行ない治安上の安全性を考慮した結果、チャド湖への流入河川であるシャリ河中流域にあるバイリ村に拠点を据えることにした。人材と資金の手当てを経て1992年1月にコーディネーターを、2月には2人の技術者を送り込んで、チャドのプロジェクトはスタートした。首都ンジャメナに連絡事務所を開設し、バイリ村民からの要望を盛り込んだ計画案も政府側との交渉で承認され、正式にチャドの社会経済開発の一翼をになうことになった。

バイリ村は首都の南300kmにあり人口も3,500人～5,000人位のかなり大きい村である。この村はずれに、今後長くかかるであろうチャドプロジェクトの中心となる現場事務所や日本人向けの宿舎などを含むコンパウンドの建設から手を付けた。用地は、村の関係者立会いの下に場所を決めてもらい、建設に必要な日干しレンガ作りから始めた。せまり来る雨季の到来を前にして、炎天下や時間に追いかけられながらも、無事雨の始まる前に完成することが出来

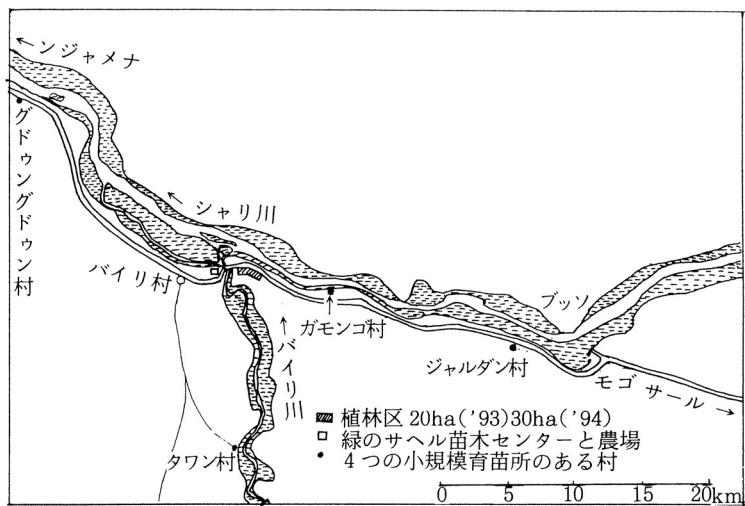


図-2 バイリ村及びプロジェクトサイト位置図

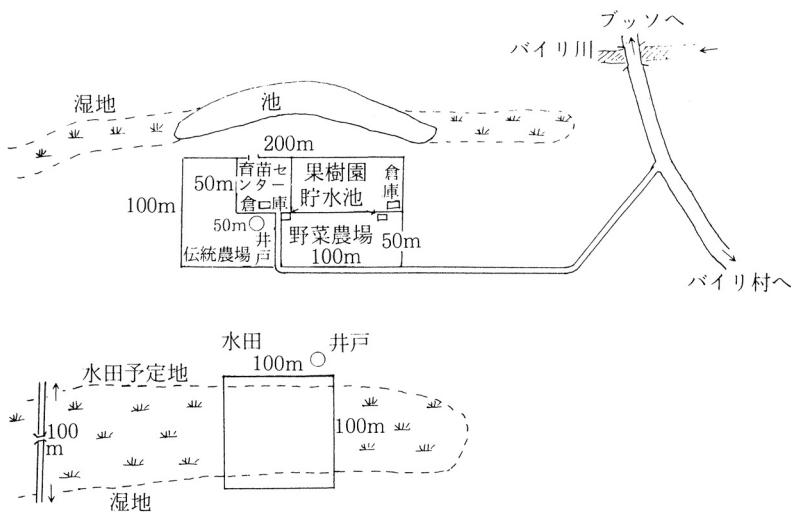


図-3 緑のサヘル、バイリ村育苗センターと農場

た。

緑のサヘルは、当面3つの点に重きを置いている。

一積極的に緑を殖やす努力……………林業部門

一緑を減らさない努力……………改良カマドの普及等適正技術部門

一食糧自給率の向上……………農業部門

#### A. 林業部門の活動

緑のサヘルとしてはとにかく会の名前にも載っているように、何とかサヘル地域に緑を取り戻したいという願いを込めたものであって、植林を中心とする緑化活動に最も重きを置いている。よく「どんな木を植えてますか、ユーカリのような早成樹ですか」と尋ねられることがある。確かに、ユーカリも一部取り入れているし、成長の速いものも取り入れているが、単純林と言うのは、サヘルのような地域では危険度が高い。周期的に襲ってくる旱魃や、バッタやイナゴの大発生などが起こると全域の危機にさらされかねないからだ。したがって、この地で最も適していると思えるのは「雑木林をめざす」ことであると信じる。ちょっと見た目はよくないが、樹高の高いもの、匍匐性のもの、鋭いトゲを有して動物に喰われにくいもの、空中窒素を固定するマメ科のもの、果実をつけるもの、外来のもの、ローカルのもの、成長の速いもの、などを混植することによって、天然災害や病害虫の発生が起った場合でも、ある種のものはやられても、他のものでカバーし、緑を残せる。残った緑や木陰を求めて集まってくる鳥類や、昆虫類、土壤微生物などの種も単純林に比べてうんと多くなり、植物のみならず動物相も殖えることが期待できる。

植林は、雑木林をめざした混交林の他にも、農業と林業および牧畜まで加えた、アグロフォレストリーに向けた植林にも取り組んでいる。つまり、穀物畠の中に耕作に障害にならない程度の密度（樹種にもよるがバイリでは10m×10m）で木を植え、防風、防砂や土壤水分の保持、肥沃度の増進、家畜の飼料用などの多目的な植林方法であって継続的な農業を営むことが出来ることが大きな利点である。バイリ村で、緑のサヘルが推奨している樹種は主に2種類に力を入れている。1つはセネガルアカシアであり他はアルビダアカシアである。セネガルアカシア (*Acacia senegal*) は、通称ゴムノキともいわれ、5年生位の成木に傷を付けると樹液を分泌し、空気に触れると美しく結晶する。これがアラビアゴムと呼ばれて、食品や化粧品の乳化剤などに使われ、国際市場でも高く取り引きされている。チャド国内でも最近ゴムの生産が多くなって来た。農民に「地球環境を守るために植林しましょう」と言う時に、お金になりますよ

と呼びかけた方がより現実的である。もう1つはアルビダアカシア (*Acacia albida*) である。別名ミラクルツリーともいわれている。それは通常の樹木は雨季に葉を繁らせ、乾季に入ると休眠するため落葉するのに、アルビダアカシアは、全く正反対に雨季に落葉し、ソルガムやミレットの耕作時には作物栽培に必要な光線をさえ切ることもなく、乾季になって周囲に緑が見えなくなる頃新芽を出し、木陰を作り、葉は家畜のエサになり防風、防砂の効果の他にも、根粒バクテリアは、土地を肥やしてくれるので、持続可能な営農を行なうには、もってこいの樹木である。この2種類を中心として本年度は、植付け面積を増やした。

さらに村内居住区にも木陰を作り、強い日差しを和らげ、防風効果ももたらすことにより乾燥化から守り、微気象の緩和に役立てるものと、公共性の強い場所、例えば小学校の周囲、農民組合の共同倉庫、森林監督官の詰め所などから優先的に植えている。

育苗センターも重要な役割を果たしている。アグロフォレストリーや雑木林に向けた植林の他にバイリ村民や周辺地域からの苗木の要望にも応えて昨年は1万6千本を育て、本年は約10万本を育成中である。初めは、どういう樹種が生育可能なのか、あるいは、地域住民はどの樹種を好むのかなどについてよくわからなかつたが、やっているうちに徐々に周囲の状況もわかり始め、住民のニーズも少しづつはっきりして来たため、それに応じて、樹種や数もバリエーションを付けながらやっている。植林用樹種ばかりでなく、マンゴやグアバなどの果樹類も取り入れている。これまで木を育てる習慣があまりなかった人たちに、手をかけて世話をすれば、やがて努力がむくわれ実を結び、子供のおやつや現金収入につながることを身をもって体験することで「木や森は天が授け賜うもの」という従来の考え方から、人間が手を加えて育てることの大切さを理解して欲しいと思ったからである。しかも果物については有料で頒布した。そうすることにより大事に育ててくれることを期待しながら。(表-1)

#### 小規模育苗所（ミニペピニエール）

初めはバイリ村とその近郊地域を対象に育苗センターで苗木を供給してきたが、リクエストは、かなり遠方からもあって、残念ながら、限られた運搬手段と雨季の道路事情の悪さから、全部の注文には応じ切れなかつたのと、苗木を種子から手を加えて育てることを身近な問題としてとらえてもらえるように、本年から半径20～30kmにある4つの村に3,000～5,000本程度の苗木を生産する小規模育苗所を設けた。緑のサヘルは、育苗に関する技術指導と種子やビ

ニールポットの提供を行ない、育苗から定植、植林後の管理に至る作業全般は、地元の農民組合や、ボイースカウト、村の青年会などが責任を持つことで開始した。実施に先立って、植林と環境に関する講習会を開催した。3日間に130名の参加者が集まり、講師陣には、緑のサヘルの日本人技術者2名の他にローカルスタッフと、ONDR（農村開発公社）、Eaux et Forêt（水森林資源監督署）、SECADEV（カトリック救援開発委員会）などバイリ地区の開発に関わる政府機関やNGOなどの責任者も熱弁をふるってくれた。参加者の中には40kmも

表-1 育成樹種リスト

樹木 <i>Acacia albida</i>	(アルビダアカシア)
<i>A. nilotica</i>	(ニロティカアカシア)
<i>A. senegal</i>	(セネガルアカシア)
<i>Albizia lebbeck</i>	(アルビジア・レベック=ビルマネム)
<i>Azadirachta indica</i>	(ニーム=インドセンダン)
<i>Balanites aegyptiaca</i>	(バラニテス・エジプシアカ=砂漠ナツメヤシ)
<i>Bauhinia rufescens</i>	(ボイニア)
Flamboyant	(フランボヤン)
Jojoba herbex	(ホホバ)
<i>Khaya senegalensis</i>	(カイセドラ)
<i>Leucaena leucocephala</i>	(イピルイピル=ギンネム)
<i>Maerua crassifolia</i>	(マエルア)
Melea des Indes	(メレア)
Orgueil chine	(オルギュユ)
<i>Parkia biglobosa</i>	(ネレ)
<i>Parkinsonia aculeata</i>	(パーキンソニア)
<i>Prosopis</i> sp.	(プロソピス)
<i>Tectona grandis</i>	(チーク)
<i>Terminalia</i> sp.	(テルミナリア)
<i>Tevetia</i> sp.	(ティベシア)
<i>Ziziphus mauritiana</i>	(ジュジュピス・モーリタニア)
果樹 <i>Anacardium occidentale</i>	(カシュー)
<i>Annona senegalensis</i>	(セネガルシャカトウ)
Avocat	(アボカド)
Citronier	(レモン)
<i>Citrus reticulata</i>	(マンダリン)
<i>Citrus aurantium</i>	(オレンジ)
<i>Citrus grandis</i>	(グレープフルーツ)
Raisin sauvage	(ブドウ—野生)

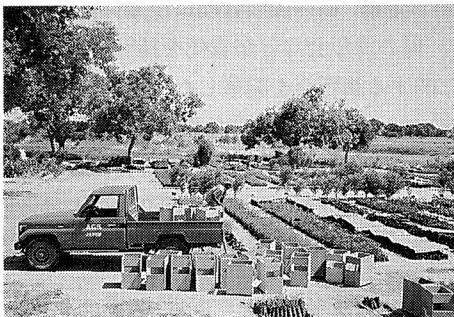


写真-3 バイリの育苗センターの1駒：種子の採取、土の混合、ポット詰め、播種、灌水、除草、硬化処理などの作業は、ほぼ年間を通じて休む間もなく行われる

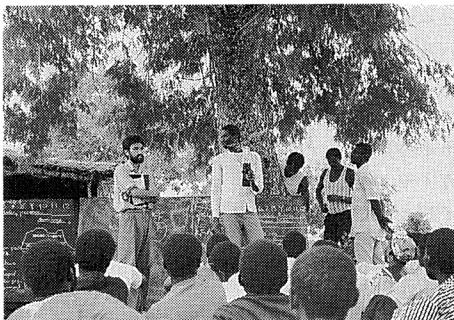


写真-4 植林と環境についての講習会、近在の村々からも若い人達や婦人層も参加し、日本人責任者の説明に聞き入る

離れた村のリーダー達も含まれ、環境問題、特に植林に対する関心の高まりを伺わせた。ミニペピニエールの設置に対する各地からのリクエストは、他にも続々と出始めた。

ブッチャム村のアラビアゴム支援プロジェクトも本年から開始した。首都ンジャメナの北東120 km にトルバという村があり、かつてこの村の裏側までチャド湖の水が来ていたがここ30年位のうちに25 km 以上も湖水は離れてしまったと古老がなげていたがこの村の附近は天然のセネガルアカシアが密生しており、最近になってアラビアゴムが高く売れることがわかり始めると、農民はより多くの生産物を得ようと、樹木の再生能力以上に成木に傷を付け一度に沢山のゴムを得ようとして始めた。そのため樹木は生命力を失ない枯死するものが続出した

が、植林や育苗の経験もなく補植することもなく放置されて来た。その後、緑のサヘルに対し、ブッチャム村民が結成した農民組合から正式に支援の要請を受け、話し合いの結果、ほぼミニペピニエールの条件と同様に、技術指導と種子、ビニールポットを提供し、農民組合が運営に責任を持つことで合意しスタートした。

このアラビアゴムのプロジェクトは、日本の「一村一品運動」ではないが、チャドの有力な産業になり得る可能性を秘めているのと、緑のサヘルは現在、治安上の理由が主で、南のバイリ村に拠点を置いているが、今後、もっと北部や東部にも活動地点を拡げたいと考えており、その第一番目のケースとして力を注

いでいる。

### B. 改良カマドの普及等適正技術部門

砂漠化を引き起こしている、人為的要因の中でもタキギの問題は、チャドでも非常に深刻である。人間が食べるものの大部分は、一度熱を通すが、チャドではその熱源のほとんどを炭かタキギに依存している。かつて家の周りから枯れ枝を拾ってこと足りた時代から、人口の増加や都市化によって、集落の周囲や都市の周辺から、次々に生木を伐られ、乾燥の後、毎日大型トラックやイカダで運び去られるため、樹木は姿を消し、緑が失われた所から次々に砂漠化が進んでいる。

そこで、代替エネルギーの導入も含めて、薪炭材の依存度を軽減させ、緑を減らさない手段を講じることにより植林活動等とも併せて砂漠化防止に役立てるという意図である。具体的な活動としては、熱効率の良い改良カマドの普及である。実施に先だって、これまで、バイリ村付近の実態調査や、聞き取り調査を行ってきた。それによると、これまで伝統的に石を3個置いた上に釜をかけ、まわりからマキをくべるというやり方である。これは熱効率は悪いが、夜は団らんの場となり、光は照明に、煙は虫よけになるなど多くの機能を併せ持っているため、すぐに、これまでの習慣をやめて改良カマドに切り替えるというにはなかなか行きにくい面がある。農民組合のメンバーや婦人グループのリーダーなどにも呼びかけて、何種類か試作したもののうちから評判の良いものを普及して行こうと、地道な活動を展開中である。その他にも、家畜の糞を用いたメタンガス発酵槽を作り、何とかチャドに定着できないかどうか試してみるつもりである。

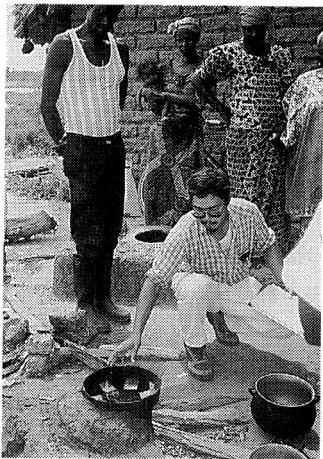
伝統的3つ石方式



普及型改良カマド



図-4 改良カマド



**写真-5** 試作したカマドの熱効率や、使い勝手などについて、おかみさん達の意見に充分耳を傾けながら、改善を加えていく

### C. 農業部門

地元民から寄せられた最も多かった要望は、植林とかカマドの普及より、とにかくまずお腹一杯にするための農業生産を上げるような技術指導をして欲しいということであった。もっともなことであって、緑のサヘルも、在来農法、蔬菜栽培、稻作の3つに区分して実施しているが、残念ながらここでは割愛する。

#### 今後へ向けて

チャドは20年来、部族間の権力闘争による内戦を繰り返してきたために、それまで努力して積み上げようとしたものを、引っくり返され、又何とか立ち上がりうるとすると、又しても次の勢力に壊されてしまうという連続であった。そのため人々の間にはやる気をなくし、優秀な人材もみきりをつけて国外に出て行ってしまった者もいる。頼みとする外国からの援助も二の足を踏まれ、支援活動を打ち切ったり、縮小する機関もある。従って国作りはますます遅れ、人々は貧困からいつまでも抜け出せずにその日暮らしの生活を送っている。

しかし、どっこい、中にはたくましく頑張っている人も居る。乳のみ児を背中にくくり付け畑で出来た作物を大声を張り上げて市場で売っているおかみさん達、40kmの遠方から植林講習会に参加した若い衆、少しでも地域社会を活性化させようと自発的に組織された農民組合のメンバー達だ。こういう人達と共に協力し合いながら、初めは小さくとも、徐々に活動内容も規模も充実させて行きたいと思っている。